

[様式14]

(対象事業：4. 地域振興と一体となったミュージアム事業)

事業名： 仙台芸術遊泳2007

事業者名： 仙台視覚芸術振興ネットワーク (SCAN)

実行委員会

(SCAN: Sendai Contemporary Art Network)

連携事業館名：宮城県美術館を代表館とする15団体連携

住所：仙台市青葉区川内元支倉34-1

宮城県美術館

TEL： 022-221-2111

FAX： 022-221-2115

HPアドレス：<http://www.pref.miyagi.jp/bijyutu/museum/>



SCAN 実行委員会事務局＝宮城県美術館

①施設概要

仙台視覚芸術振興ネットワーク (SCAN) は仙台圏の美術館、博物館、ギャラリー、大学等の15団体が連携して地域の芸術振興に取り組む連携組織。「仙台芸術遊泳2007」にはこのうち11団体が参加した。代表館・宮城県美術館のほか、仙台市博物館、せんだいメディアテーク (smt)、宮城教育大学の4団体が幹事館。

②事業の意図目的

仙台の観光イベントと連動する芸術プログラムを共通テーマのもとでSCAN参加館が共同で企画し、アートのかたを回遊する“芸術遊泳”の楽しみ方を広く市民に提案するとともに、東北圏の美術館周遊を促進する展覧会案内「東北ミュージアムガイド」を刊行し、情報サービスの面からも文化施設と市民・地域との結びつきを強め、魅力ある芸術拠点を形成して文化的活力のある“ミュージアム都市”仙台の創造に寄与することが本事業のねらいである。

③事業概要

・芸術プログラム……仙台のかをイルミネーションで飾る恒例の観光イベント「光のページェント」に合わせて「光と都市」を共通テーマとして設定し、光のインスタレーションや「光」を題材とする絵画、工芸、デザイン、映像、ダンス、短歌など、多様な表現分野の展覧会やパフォーマンス、ワークショップ、さらには夜景ウォッチングのか歩きツアーなど、光に親しむ多彩な企画を仙台市9会場、塩竈市2会場、大崎市1会場で同時多発的に開催した。

・情報発信……東北圏の美術館の展覧会情報を集約した「東北ミュージアムガイド」を刊行するモデル事業を実施し、100余館の情報をハンディな印刷物にまとめ、文化施設やホテルなどに無料配布、ミュージアム利用の促進を図った。また、インターネットを「芸術遊泳」の仮想拠点として活用するため、質の高いデザインのSCANウェブサイトと学芸員が市民に向けて発信するブログを開設した。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物：「仙台芸術遊泳2007」総合パンフ、塩竈市・大崎市版広報チラシ
スタンプラリー・カード、芸術遊泳ホームページ (scan-net.jp)
「東北ミュージアムガイド」2007年11-12月号、2008年1-3月号

作成した報告書等

ビデオ：「仙台芸術遊泳2007」記録集 (ビデオ版)

冊子：「仙台芸術遊泳2007」記録集 (図録)

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 24,769人

内 訳 (別紙「仙台芸術遊泳2007 会場別参加者数一覧」の通り)

(1) 事業の実施状況について

I. 実施体制について

「仙台芸術遊泳」は平成 17 年度に第 1 回を開催。SCAN はその際に生まれたネットワークで、第 2 回目の今回はこれに歴史、民俗、文学など美術分野以外の施設も加え、大学との連携も強めて、各団体から学芸スタッフが集まり、共同学芸チームを結成して実施した。各会場のプログラム内容は学芸チームで協議して決定し、予算管理、輸送・人員の手配、統一広報、記録等の運営は事務局の宮城県美術館を中心に幹事団体が一括して行った。全 10 企画を同時進行で運営する業務はかなりの作業量であった。今後検討すべき課題は、各参加施設独自の学芸機能を生かしつつ、ネットワーク効果を高める運営体制のあり方や資金調達の方法などである。

II. 芸術プログラム「光と都市」の概要

①宮城県美術館「光と遊ぶ・闇と遊ぶ」11 月 13 日～11 月 25 日

人の動きに感応する発光体や映像作品など視覚の不思議を楽しむ展示空間を 3 作家 1 集団で構成。光のオブジェを作る親子向けワークショップや、日没後に美術館ロビーと中庭一面に光る風船を設置する環境アートのイベントも開催した。

【右図-平野治朗「闇と遊ぶ: GINGA 美術館」】



②せんだいメディアテーク「光の航跡 Off Nibroll」12 月 1 日～12 月 24 日

振付家と映像作家のユニット Off Nibroll の身体と映像を交錯させたインスタレーションとダンス・ワークショップを開催。「光のページェント」に合わせて観覧時間を正午から夜 9 時の時間帯にシフトした効果もあり、来場者は同館初の 1 万人超を記録した。

③仙台市博物館「光のダブルイメージ」12 月 12 日～12 月 24 日

博物館内のさまざまな場所に、窓から差し込む光を描いた現代絵画（松尾藤代）と光を題材にした浮世絵などの博物館コレクションとを対比的に展示し、屏風絵の照明ワークショップも実施。文化財と現代アートが交錯する「光」の空間を演出した。

④仙台歴史民俗資料館「くらしの中のあかり」12 月 11 日～2 月 27 日

明治から昭和まで仙台地方で使われた行灯、燭台、ランプなどの館蔵品と、地元の陶芸家・高倉健の「陶あかり」、仙台在住の国際派デザイナー木村浩一郎のポップな EL 照明器具を組み合わせ展示し、行灯制作ワークショップも開催した。

【右図-高倉健「陶あかり」と行灯・燭台（背景）】



⑤仙台文学館「うたびとが詠む“光”のことば」12 月 20 日～2 月 24 日（会場は smt）

「光」と「ことば」をテーマに、光を詠んだ短歌をモニター展示し、歌人・俵万智と小池光館長の「光」談義、向田邦子作品を題材とする音楽と朗読の夕べなどを実施した。

⑥東北福祉大学ステーションキャンパス「仙台照明探偵団」12 月 15 日、18 日～26 日

「照明探偵団」を主宰する照明デザイナー面出薫を講師に、夜景ツアーの写真をもとに仙台の光環境を批評するトークサロンを開催。成果はエリアマップ化して展示した。

⑦大崎市民ギャラリー緒絶の館「ヒカリマーケット——見て、触って、遊ぼう」

12月8日から2月24日

参加型のライトアートを手がける村松泰三が展示室に光を楽しむ仕掛けを設置。「光の箱」「光のツリー」の制作ワークショップも実施し、定員を超える人気となった。

【右図-ヒカリマーケット展示風景】



⑧東北工業大学一番町ロビー「純白都市」12月21日～12月26日

同大槻橋研究室（建築）と映像作家・阿部伸吾が多数の学生サポーターとともに冬の都市風景をイメージした立体的な映像空間を構成。ダンスのイベントも開催した。

⑨菅野美術館「塩竈ナイトミュージアム～雪アカリ砂あかり～」(塩竈市)

12月19日～2月26日

常設展終了後の夜間開館で新たな観客層の開拓を試みた。館内に雪のイメージ映像を投影、蓄光剤を加えた砂のオブジェも展示して個性的な建築空間を幻想的な光で演出。

⑩ビルドスペース「映像の中の光／景」(塩竈市)12月21日～12月26日

詩的な映画作品を非営利ギャラリーで夜間に上映。菅野美術館の夜間開館と連動させ、塩竈地区用の共通チラシも作成し、美術人口の少ない塩竈市内での誘客を図った。

「SCAN スタンプラリー」について

参加各館がグッズを提供し合って「スタンプラリー」を実施した。ネットワーク事業の定番だが、仙台圏の公立施設では初の試み。各会場にカード、スタンプ、回収箱を置いた結果、全会場踏破1名も含め80名近い応募があった。

Ⅲ. 情報発信「東北ミュージアムガイド」の刊行

東北圏（東北6県及び新潟県）の美術展覧会案内を掲載するハンディなパンフレット「東北アートガイド」を刊行し、文化施設、観光案内所、ホテルなどに配布するモデル事業が「仙台芸術遊泳2007」のもうひとつの柱であった。2008年度からは民間運営に移行させることを想定し、地元のホテル向け観光情報誌制作会社の協力を得て、継続して刊行できる制作体制やコスト等を考慮しつつ計画を練った。

宮城県美術館を中心にSCAN内に制作チームを作り、情報収集から制作管理、配布までを一貫して行った。掲載基準は、宮城県博物館等連絡協議会に加盟する美術系博物館及び東北美術館会議の加盟館とした。全2回、各5万部発行し、制作会社のホテル配布ルートも活用して、東北全域のホテル約100ヶ所、文化施設約200ヶ所に配布した。100余館の情報を2色刷A3判にコンパクトに収めるデザインに苦心したが、幸いガイドは実際に多くの県外施設でも情報コーナーに置かれ、利用者の手に渡った。この「東北アートガイド」を継続刊行をめざして安定したスポンサーを確保し、魅力あるエリア周遊ガイドとして育てていくことが今後の課題である。



（２）地域との連携について

（１）仙台圏の SCAN 連携組織

SCAN は以下の 15 団体の連携組織であり、今回の「芸術遊泳 2007」にはこのうち 11 団体が参加した。このネットワークは企画に応じて自由に参加できる柔軟性を持つ。今後、新たに SCAN 参加を希望する館もあり、地域連携の輪は拡大していくと思われる。

〈仙台視覚芸術振興ネットワーク（SCAN）構成団体〉（平成 20 年 1 月現在）

宮城県美術館・仙台市博物館・せんだいメディアテーク・宮城教育大学・仙台文学館・仙台市歴史民俗資料館・地底の森ミュージアム・東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館・東北工業大学一番町ロビー・東北大学総合学術博物館・石ノ森萬画館・大崎市民ギャラリー一緒絶の館・リアス・アーク美術館・菅野美術館・ビルド・フルーガス

（２）東北圏の情報共同発信ネットワーク

「東北ミュージアムガイド」の制作は、東北圏の拠点美術館に趣旨を説明し、理解を得たうえでスタートした。また、「芸術遊泳」の期間中、平成 19 年 12 月に「地域連携」をテーマにせんだいメディアテークで開かれた第 19 回東北美術館会議に美術館関係者が多数集まった機会に、「東北ミュージアムガイド」第 1 号を紹介して協力を呼びかけた。今回のモデル事業では、SCAN 事務局が独自に展覧情報を各館の広報物やホームページ、タウン誌などの情報源から収集したが、広報の充実は各館共通の関心事なので、ガイドの刊行がきっかけとなって情報発信の共同化への気運が高まることを期待したい。

（３）民間セクターとの連携の芽

光をテーマとする「芸術遊泳 2007」では液晶プロジェクターを複数の会場で多数必要としたが、エプソン販売（株）仙台支店から機材の無償提供を受けることができた。こうした企業協賛を今後さらに開拓したい。

「東北ミュージアムガイド」の刊行にあたっては、仙台観光コンベンション協会の仲介で観光情報誌制作会社と共同作業を行い、民間事業者とのパートナーシップを探るきっかけとなった。今後は「ガイド」発行を支援するスポンサーやメセナとも地域連携の視点から関係作りを進めたい。

（３）成果物について

「東北ミュージアムガイド」は 19 年度芸術拠点形成事業の期間中に 2 号制作し配布した。単年度で終了する芸術拠点形成事業においてはあくまで試行にとどまるが、モデル事業の成果物をスポンサーやメセナの獲得のためのサンプルとして活用し、安定的な情報発信事業につなげていきたい。

（４）参加者の反応

展示会場やワークショップ会場における参加状況の観察、アンケートや感想の聞き取りなどを総合すると、親しみやすく楽しい内容、「ひかりのページェント」との相乗効果、現代アートと歴史・民俗資料など異なるジャンルの組み合わせなどが関心と呼んだことが共通項として浮かび上がる。

試験的に行った「スタンプラリー」で、全会場踏破者も含め、数箇所を回遊した熱心な観覧者が相当数いた。PR 不足もあって回収率は総来場者の 1% 未満だったが、回遊の楽しさを提供しようという「芸術遊泳」のねらいがある程度アピールしたことをサンプル的に示しているといえるだろう。

学芸員が現場の生の声を伝えるブログは、運営上の問題から、一般開放して観覧者の声を掲載するには至らなかった。しかし、「芸術遊泳」を見た感想や批評を自主的に発信するブログがいくつかあり、即時的なフィードバックとして主催者側も興味をもってチェックした。多数のインターネット利用者とのコミュニケーションの可能性は今後、研究すべきテーマであろう。

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

都市イベントと連動したネットワーク事業「芸術遊泳」は見込みを大きく上回る集客効果を発揮し、参加館全体で常設展の観覧者数も押し上げるという即時的な効果が生まれた。また、協同で作業を進めることで、参加した美術館、博物館、大学等の結束が強まり、外部セクターとの連携のきっかけも生まれたことが、長期的視野から大きな成果と言える。

主な具体的効果として、以下のようなものが挙げられる。

- ①参加者数は当初見込みの 2 倍の約 2 万 5000 人にのぼり、これと連動して冬季に落ち込む常設展の来館者数をアップさせる効果があった。約 200 万人を動員する都市イベント「光のページェント」の時期に合わせて「光と都市」をテーマに集中開催たことで、マスメディアでも頻繁に取り上げられ、注目度が高まった結果と思われる。
- ②ネットワーク事業ならではの「スタンプラリー」という観客サービスと来館促進の手法が可能になった。来館者を数としてみるだけでなく、スタンプラリーを通じて来館者とのある種の双方向の関係が生まれた。
- ③SCAN 参加館にネットワーク意識が生まれ、相互協力の気運が高まった。縦割り行政の枠を越えた横断的な発想をもてるようになり、美術系の学芸チームが他館を支援したり、相談機能を発揮したりするなど、各館の学芸スタッフ間のコミュニケーションが活発になった。「学都仙台」の特色を生かしたミュージアムと大学の連携も実現した。
- ④「東北ミュージアムガイド」の刊行をきっかけに、東北圏に 100 を越える美術館があることが目に見える形で表現され、県境を越えた協力の芽が生まれた。
- ⑤観光コンベンション協会、観光情報メディアとの協力関係など、民間セクターとの連携のきっかけづくりができた。

(6) 新聞記事等

○新聞記事

[左] 朝日新聞 平成19年11月23日(金) 朝刊12面

[右] 河北新報 平成19年11月24日(土) 朝刊14面



同様の新聞記事 読売新聞 平成19年11月20日 朝刊34面
 読売新聞 平成19年12月12日 朝刊16面 (カンパニーユ)
 産経新聞 平成19年12月 7日 朝刊24面
 河北新報 平成19年12月12日 夕刊 1面 (河北抄)
 河北新報 平成19年12月15日 夕刊 1面 (ウィークリーeye)
 大崎タイムス 平成19年12月3日 朝刊7面
 新美術新聞 平成19年12月1日号 2面

○テレビ／関連誌等

ミヤギテレビ「OH! バンデス」平成19年12月12日午後4時15分から7分間放映

東日本放送「スーパーJチャンネルみやぎ」平成19年12月13日18時30分から5分間放映

「伊達人」平成19年秋号「特集・仙台芸術遊泳2007 光と都市」(宮城県文化振興財団)

「仙台経済界」平成20年1-2月号「光のアートがミュージアム都市・仙台の冬を彩る」

「るるぶFREE」冬号 仙台から一足のぼしていく近郊観光ガイド (JTBパブリッシング)

「S-style」平成19年12月号 art&event schedule 紹介記事 (株・プレスアート)

「河北Weeklyせんだい」平成19年12月13日号 紹介記事 (河北新報社)

「machinavi PRESS」平成19年12月号 ピックアップ! イベント情報 (有・キャンプ)

「BERRYマガジン」平成19年12月号 (BERRYマガジン編集部)

「博物館研究」平成19年12月号 12月のもよおし (日本博物館協会)

「歴史研究」平成19年12月号 催し物案内 (歴研編集局)

「目の眼」平成20年1月号 美術館・博物館情報 (里文出版)

仙台芸術遊泳 2007 会場別参加者数一覧（展覧会観覧者、ワークショップ参加者等）

参加者合計:24,769 人

名称	会場	期日	参加者 見込(人)	参 加 者 (人)
光と遊ぶ・闇と遊ぶ	宮城県美術館	11 月 13 日～25 日	2,000	3,089
光の航跡 －Off Nibroll	せんだいメディアテーク	12 月 1 日 ～12 月 24 日	3,000	10,453
光のダブルイメージ	仙台市博物館	12 月 12 日～24 日	2,000	1,999
くらしの中のあかり	仙台市歴史民俗資料館	12 月 11 日～27 日	500	1,019
うたびとが詠む「光」 のことば	仙台文学館企画(会場 せんだいメディアテーク)	12 月 20 日～24 日	4,000	6,889
仙台照明探偵団	東北福祉大学・鉄道交 流ステーション	12 月 15 日、18 日～ 26 日	—	166
純白都市	東北工業大学一番町ロ ビー	12 月 21 日～26 日	300	290
ヒカリマーケットー見 て、触って、遊ぼう	大崎市民ギャラリー	12 月 8 日～24 日	500	646
塩竈ナイトミュージ アム	菅野美術館	12 月 19 日～26 日	300	154
映像の中の光／景	ビルド・スペース	12 月 21 日～26 日	300	64
		参加者合計→	(12,900)	24,769